B07 シュルツェマダニにおけるライム病ボレリアの伝播様式：若虫から幼虫への
cofeeding transmission

佐藤雪太[○]、中尾 稔（旭川医大・寄生虫）

Transmission of the Lyme disease spirochete, *Borrelia garinii*, from
Ixodes persulcatus nymphs to larvae during their cofeeding on mice

Sato, Y. and Nakao, M.

シュルツェマダニでは幼虫と若虫が野生齧歯類に吸着しており、幼虫はライム病ボレリアを持つ齧歯類を吸血して初めて病原体を受け取る。自然界では同一宿主に幼虫と若虫が同時に吸着していることがあり、その際、宿主の皮膚を介して保菌若虫から近傍の幼虫へボレリアが伝播する可能性がある。そこでボレリア感染若虫と未感染幼虫を同時にマウスに吸着させ、飽血した幼虫を回収し若虫まで発育させてボレリア伝播の有無を調べた。その結果、若虫と幼虫を一緒に入れたチェンバーを頭皮に固定して吸血させた群ではボレリアの伝播が見られたのに対し、若虫と幼虫を分離してチェンバーに入れてそれぞれ頭皮と背皮に固定して吸血させた群では伝播は見られなかった。また、チェンバーを用いずに若虫と幼虫を自由に吸血させた群では、きわめて少数の個体にボレリアの伝播が見られた。

B08 長野県における1996年のマダニ咬症

内川公人（信州大・医・寄生虫学）

Tick bite cases in 1996 in Nagano Prefecture

Uchikawa, K.

佐久総合病院、長野県衛生公害研究所、信州大学に1996年中に受診または紹介されたマダニ咬症は約90例であった。症例数は年々増加しているが、地域差が著しく、佐久地方に例年になく少なかった反面、上伊那地方からの報告が多かった。虫体が確認された例では全てがマダニ属であり、チマダニ属による症例は皆無であった。シュルツェマダニ（39例）とヤマトマダニ（27例）が主要種で、長野県では標高の低い長野市周辺にタネガタマダニの寄生例2例が見られた。シュルツェマダニによる咬症が多いことは例年どおりであったが、ライム病を発症した患者は前年と比較して著しく少なく、現時点では松本地方の2症例を数えるのみである。ただし、ライム病特有の症状があったり血中抗体価が高い咬症患者が、後にライム病と診断されている可能性を否定しない。